

土方巽・暗黒舞踏の言説と受容

稲田 奈緒美

〈はじめに〉

1950年代末、土方巽によって創始された暗黒舞踏、及びその他の作家による舞踏は、日本のオリジナルな舞踏ジャンルとして現在では認識されている。時代と共に数々の言説が登場して舞踏家たちの思想の随伴者となり、新しいジャンルとして受容されるための大役を担った。一方で、故人となった土方に関する言説は、個人の資質や物語に収斂させる神話化、あるいは東北や日本の前近代的民俗性に回収させる本質主義の傾向が強いことが、近年になって指摘され始めた(*1)。従来の言説を時間的な距離をおいて俯瞰し、歴史の中で相対化することは、舞踏の多様な可能性を未来に開くために無益なことではあるまい。言説を一旦括弧に入れることによって、同時代的観点とは異なる舞踏の特質も見いだせるだろう(*2)。よって本稿では、土方の暗黒舞踏を言説の特徴から前期〈1〉と後期〈2〉に分け、さらに80年代に海外進出して以降の舞踏〈3〉について、同時代の支配的な知的枠組を参照しつつ分析する。対象はあくまでも言説であり、作家、作品ではない。

〈1〉前期暗黒舞踏 (1959~1968)

1959年の『禁色』上演に始まる前期の作品の特徴を大掴みすれば、土方の出自でもあるモダン・ダンス界の様々な制度、慣習、美的規範に反逆した反モダン・ダンス、反舞踏であるといえよう。同時代のネオダダ、ハイレッドセンター、シュールレアリズムなど前衛美術(反美術)の芸術家との呼応によって、そのアナーキーな手法は加速された。特に様式や技術に反した動きとその暴力性、ホモセクシャルなどタブーやエロティシズムを扱う主題、モチーフはモダン・ダンス界に衝撃を与えた。批判を受けて土方は協会から離脱するが、これは従来の制度と規範を侵犯する前衛舞踏として、意味を付与される始まりでもあった。

『禁色』という作品名は三島由紀夫の小説名を借りたものであり、これを機に三島の知遇を得る。土方と意気投合した三島は『650EXPERIENCEの会』プログラムに「推薦の辞」を寄稿し、その後も公演のたびに寄稿している。当時、三島は前衛芸術の権威であり、三島に認められることが前衛として認知されることでもあったことから、ここに土方の戦略を伺うことができる(*3)。三島は澁澤龍彦を紹介し、瀧口修造、埴谷雄高など前衛

芸術の擁護者、理解者も加わり、土方の周辺には前衛の旗手たちが集い前衛芸術界を席卷した。

文筆家はプログラムだけでなく一般誌でも暗黒舞踏について執筆し、象徴的な語句と共に言説は確立されていく(*4)。従来のモダン・ダンスでは肉体を媒体として思想や感情、物語が「表現」されてきたが、土方は肉体と運動、その猥雑さや暴力性を「呈示」し、サド、ジュネ等フランス異端文学からのモチーフによって反社会性、反道徳性を表した。当時、一般には民主主義やマルクス主義が流布していたが、土方たちはそのようなイデオロギーに安易に巻き込まれることはなかった。戦前から戦後にかけて価値が転倒し続ける中で、彼等は根源的な時代の不安、人間の危機を見据え、土方の舞踏にその凝縮された姿を見いだしたのである。敷衍すれば「日本の近代」に包含される社会、文化、芸術の規範や制度への懐疑、アンチテーゼに発する“前衛”という枠組で暗黒舞踏をとらえたとみなせる。

ここに、“日本の近代”に対する反近代、反西洋という図式が成立する。その後徐々に拡大する言説では、この文脈のもとで様々な二項図式が見出されていく。「言葉と肉体」「文明と原始」「理性と本能」「意識と無意識」「現実と快楽」「偽りの自己と真の自己」等々。これらは時代状況の中で浮上してきたサルトル、ニーチェ、サド、小劇場運動におけるアルトー、美術、文学におけるシュールレアリズムなどの思想、観念の流行がもたらしたものであった。このように理解しやすい近代的な二項図式は、暗黒舞踏を前衛的な舞踏として認識、解釈することを容易にした。だが、同時に「十八世紀の合理主義に対する十九世紀のロマン主義的反動から生まれてきた“ブルジョワ神話”」(*5)に再び陥る危険性を孕んでいたことは否めないだろう。

〈2〉後期暗黒舞踏 (1968~1986)

1968年、細江英公が秋田の農村風景の中で土方を撮影した写真展(*6)が開かれ、翌年に写真集『鎌鼬』として出版される。写真展について種村李弘が執筆した批評文(*7)から、「肉体の叛乱」という言葉が同年の公演『土方巽と日本人』の副題として後に付されることになる。写真に現れた農村のトリックスターのような土方の姿と、「肉体の叛乱」という言葉は、以後土方と暗黒舞

踏を象徴するイメージとして繰り返し使用されていく。

公演後、土方は表舞台から遠ざかり、その間に土方の神話化が進む。そして、72年『四季のための二十七晩』公演の際、自ら「東北歌舞伎」と称したこともあり、暗黒舞踏をめぐる言説は「東北回帰」「土着」「民俗」へと比喩していく。こうして、〈1〉では「日本の近代」への対立項として「反近代」「反西洋」を置いた図式の後者が、「前近代」に置き換えられて浸透することになる。

背景には、高度経済成長を経て60年代末に学生運動が挫折し、70年の大阪万国博覧会を経た後の民俗学ブームがあった。豊かさや安定を得た一方で、戦後の近代化を推進したイデオロギーの破綻に瀕して、「日本の近代」に代わる近代化以前の日本的なるものを希求し、アイデンティティの獲得を望む風潮が民俗、土着の探求へと向かったのである。この頃土方も、柳田国男、折口信夫らの著作に親しみ、公演では東北=前近代、民俗、土着を表す動き、美術、音楽などを多用した。その後、74~76年の白桃房の公演では前近代、東北色は薄れてはいるが、遺作となった85年の『東北歌舞伎計画1~4』のタイトルや、自伝的著書『病める舞姫』(*8)で表された少年時代の風景によって、この図式に基づく言説は強化され現在に至っている。

このような言説は、理解が容易でノスタルジーも喚起する。同時代には、暗黒舞踏の理解と受容のための先導役を果たしたのは確かだが、作品の豊穡で多義的な意味、特質、問題性に対するその他の解釈、視点の道をふさぐきらいがある事は否めないだろう。近年、このような文化的、人種の本質主義解釈に代わる言説として、バーチャル文化の中での“身体本質主義”とでも言える「リアルな身体」等を立てるむきもある。本質主義や二項図式の再生産を回避しつつ、知的枠組を相対化しながら、現代にも通じる多様な分析が継続されることが今後の課題となろう。

〈3〉1980年代以降のBUTOH

1980年以降、舞踏家の海外公演が活発になり(*9)、舞踏は「BUTOH」の名で認知されていく。その際、海外での受容はオリエンタリズムが専らであり、禅、戦後の荒廃、原爆などと結びつけた日本の民俗性、歴史的特殊性という差異によって解釈された。海外での評価が逆輸入されて、舞踏は日本国内でも知られるようになるが、同時にオリエンタリズム、本質主義的解釈を浸透させる役割も担った。舞踏家の中にはこのような解釈を内面化する者も現れる。近年では、ポスト・コロニアル状況を受けて舞踏を禅、始原、自然の身体と重ねて普遍的なものともみなし、クロスカル

チュアルに越境または同心円的に拡大させ、西欧にも適応可能とする解釈も現れてきた(*10)。特殊性から普遍性へと転じてはいるものの、ナイーブなオリエンタリズムに変わりはない。その延長で欧米では、癒し(セラピー)、エコロジーと結び付いて活動しているBUTOHも少なくない。

舞踏は、継承されるよりも常に批判と創造にさらされることで、舞踏界だけでなく舞踊界全般に豊かな可能性を与えることができるだろう。実際、ポスト舞踏世代の振付家には国内外共に舞踏の様式、メソッド、思想を独自に抽出し、コンテンポラリー・ダンスとして作品化する者も現れている。舞踏と同様にその研究も、前例に捕らわれない自由な発想で、批判と創造を続けることによって新たな実りを結ぶことを望んでやまない。

(註)

- *1 マロッチェ、ウイリアム「舞踏の問題性と本質主義の罟」(川水美穂子訳、『シアターアーツ』1997年2号、晩成書房、p88-96)
- *2 拙稿「土方巽の舞踏と文章—形式と文体による舞踏解読の試み」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第46輯、2001
- *3 堂本正樹氏へのインタビューによる。
- *4 濫澤龍彦は『宝石』(光文社、1965年11月第2号)で「あるエネルギー・現代の不安を踊る」、『展望』(筑摩書房、1968年7月第115号)で「肉体の不安に立つ暗黒舞踏」他を執筆。埴谷雄高は『世界』(岩波書店、1962年8月号)で「動と静のリズム」を執筆し、文中の“胎内瞑想”は暗黒舞踏を象徴する言葉となる。
- *5 外山紀久子『帰宅しない放蕩娘』1999、勁草書房、p26
- *6 『とてつもなく悲劇的な喜劇—日本の舞踏家・天才く土方巽』主演写真劇場』
- *7 『美術手帖』美術出版社、1968年6月号
- *8 77年~78年に雑誌『新劇』(白水社)で連載。83年、同社より単行本として刊行。
- *9 土方は、78年のパリ市フェスティバル・ドートンヌ『間展』に「闇の舞姫十二態—ルーブル宮のための十四晩」を構成し、83年「日本の乳房」を構成してイギリス、ドイツ等で上演しているが、自身は海外へ出ることはなく86年に早すぎる死を迎えた。80年に大野一雄がフランスのナンシー演劇祭他に出演し、山海塾も初のヨーロッパツアーを行う。82年には大駱駝艦がアメリカン・ダンス・フェスティバル他に出演し、その後海外を拠点に活動する舞踏家も増えた。
- *10 Holborn, Mark “Butoh: dance of the dark soul” New York, Aperture, 1987. Fraleigh, Sondora Hoton “Dancing into Darkness: Butoh, Zen, and Japan” University of Pittsburgh Press, 1999